

合評会コメント

筑波大学 宮本 陽一郎

一橋大学大学院言語社会科学研究所の研究プロジェクト「トランスアトランティック・モダニズム」の合評会に、コメンテーターとしてお招きいただいたことは、大きな光栄であった。このプロジェクトは、ポール・ギルロイの『ブラック・アトランティック——近代性と二重意識』を起点としながら、モダニズムをトランスアトランティックな時空間として再定義する画期的な試みである。紀要『言語社会』第5号（2010年）に掲載された5本の論文の水準は最先端というにふさわしいものであり、かつ5人の論者による討議が「座談会」として掲載され、この研究プロジェクトの意義が掘り下げられている。わが国における「研究プロジェクト」の水準という点でも最前線に立つものといえる。

「座談会」が余すところなく物語るように、5人の論者はプロジェクトの理論的前提を高い水準において共有し、それゆえに5本の論文は相互に呼応し新たな展望を開いている。

プロジェクトの責任者である中井亜佐子氏の「新しさはいかにして世界に登場するか——現代英語詩の想像力と近代性」は、「トランスアトランティック」という設題の意義を最も端的に示すものである。ターナーの<<奴隷船>>からデヴィッド・ダビディーンの『奴隷の歌』（1984年）に至る壮大なパースペクティブのなかで、中井論文は「近代という時空間を今一度、つながりを持つ歴史として」捉え直すことを提案する。その結果、ダビディーンの詩は「ポストコロニアル文学」「カリブ文学」あるいは「マジック・リアリズム」といったより無難な参照枠に格納されることなく、「終わることのない近代」という問題系のなかで論じられ、かつ問題系そのものの更新を迫る。

同様に河野真太郎氏の『『ハワーズ・エンド』とグローバル・イングランド文化の出現』は、フレドリック・ジェイムソンがすでにE・M・フォースターの作品のなかに読み取った帝国主義とモダニズムの連鎖を周到に辿り直すことを通じて、フォースターのテキストに伏在する「勃興的グローバリズム」を明らかにする。これもグローバリゼーションという視座から「終わることのない近代」を問題化することを促す論考である。

異なる視点からそれぞれにファシズムを論じた、中山徹氏の「大西洋横断的視差——共感的知性の二律背反」と越智博美氏の「アメリカの白いヨーロッパ——南部農本主義者のファシスト」を併せ読むとき、モダニズムにおける「ファシズム」という言わば袋小路のような論題が、新たなパースペクティブに開かれることに驚きを禁じえない。そこでは、デュボイスとウィングダム・ルイスとアグレリアンたちのあいだに、複合的な近接性が生じる。両論文が示唆するのは、イデオロギーとしてのファシズムである以上に、ファシズムをめぐって大西洋を横断しつつ展開した「イデオスケープ」（アルジュン・アパデュライ）でもある。トランスアトランティックなパースペクティブは、必ずしも大西洋横断航路によるエスノスケープの変化のみによってもたらされるものではない。平等主義、アナキズム、共産主義といったイデオロギーがもたらした、トランスナショナルなネットワークに

ついても、同様の再検討が必要とされるだろう。それは近代化の副産物ではなく、むしろ近代化のひとつの相、場合によっては近代化そのものをもたらした因子として捉え直されるべきであろう。

三浦玲一氏の「五〇年代アメリカのモダニズムと帝国主義——『キャッチャー・イン・ザ・ライ』における冷戦リベラリズム」は直接「トランスアトランティック」を扱ってはいないが、しかしこのプロジェクトの根底にある問題意識を明らかにするものと言える。それを物語るかのように、合評会における議論のかなりの部分は、三浦氏の問題提起に応えるものとなった。三浦氏は「ネオリベラルな現在を批判的に見る視座を獲得する」ことの緊急性を訴え、ネオリベラリズムの起源を冷戦リベラリズムに辿る。こうした視点からの冷戦リベラリズムの問題化は、越智論文にも共通するテーマである。私自身は、現在のアカデミアの抱える問題を、ネオリベラリズムというキーワードのみで絡めとることには躊躇を感じるが、ひとつの有効な切り口であることは疑いえない。

合評会で、久しぶりに大田良信氏にお目にかかり議論をすることができたのは、嬉しい驚きだった。大田氏に最初にお目にかかったのは、20年以上前に立ち上げた「文学・批評・理論」研究会という、外部資金などまったく期待できない、日本在来型の読書会でのことだった。私は、この読書会にフレデリック・ジェイムソンを招いた1993年あたりから違和感を感じるようになり、グローバリゼーションの一步手前で脱落してしまった。

手弁当の読書会にノスタルジアはまったく感じないが、しかしプロジェクト型の研究によって外部資金を得るとき、グローバル化・競争原理・成果主義といった「ネオリベラリズム」の諸兆候を私たちは免れることはできない。ささやかな読書会を外部資金ゼロで行っていた時代よりも、教育・研究に振り当てられる国家予算そのものが激減している現在、私たちの獲得する研究資金は、誰を搾取することによって成立するのだろうか？また単にそのような資金を拒絶することが、ネオリベラリズムに対する有効なレジスタンスになりえないことは、グローバリゼーションに対する批判的視座を獲得することの困難さとも同型である。

グローバリゼーションとネオリベラリズムの現在から、冷戦をさらに近代を問い直す試みは、自覚的な政治意識によって深められるべきである。合評会における議論は、その意味においてきわめて有意義であった。